日本英文学会関東支部
第 22 回（2022 年度秋季大会）
プログラム

日時： 2022 年 10 月 30 日（日）

会場・開催校：中央大学 市ヶ谷田町キャンパス

〒162-8478 東京都新宿区市谷田町１丁目１８

アクセス

東京メトロ（有楽町線・南北線）「市ヶ谷駅（6 番出口）」より徒歩 1 分、JR 中央線、JR 総武線、都営地下鉄新宿線「市ヶ谷駅」より徒歩約 5 分、都営地下鉄大江戸線「牛込柳町駅」より徒歩約 10 分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail: kanto@elsj.org

市ケ谷田町キャンパスへの入構方法

大会に参加予定の会員・関係者は、正面入り口（東京メトロ『市ヶ谷駅（6 番出口）』正面）よりお入りください。東京メトロ『市ヶ谷駅』1-4 番出口は、お堀の反対側となります。地下道はありませんのでお気をつけください。

キャンパス入構時の遵守事項

（大学からの注意事項に準ずる）

〇入構時に、モニターで検温を実施してください。

〇館内は、マスク着用必須です。手洗いやうがい、手指消毒等をこまめに行ってください。

〇以下の場合はキャンパスへの入構はできません。

・本人が発熱（37.5 度以上）又は体調不良の症状（咳、喀痰、喉の痛み、全身倦怠感等）がある。

・医療機関を受診し、PCR 検査等を受ける。

・新型コロナウイルスの感染者または濃厚接触者となる。

・新型コロナウイルス接触確認アプリから通知を受けた。

・同居の家族が医療機関を受診し、PCR 検査等を受けるまたは感染者となる。

<table>
<tr><td>12:00</td><td colspan="3">開場・受付開始
（受付：1 階エントランスホール、控室：8 階 801 教室、書籍展示：3 階 301 教室前）</td></tr>
<tr><td>12:30
｜
12:50</td><td colspan="3">総会
7 階 702 教室</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">第 1 室　7 階 701 教室</td><td>第 2 室　7 階 702 教室</td></tr>
<tr><td>研究発表 1

13:00
｜
13:40</td><td colspan="2">愛されることを学ぶ――『リア王』における眠りの舞台表象に関する一考察

（発表者）篠原健吉
（司会）　前沢浩子</td><td>開催なし</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">第 1 室　7 階 701 教室</td><td>第 2 室　7 階 702 教室</td></tr>
<tr><td>研究発表 2

13:50
｜
14:30</td><td colspan="2">流通する名前――『互いの友』における「見せかけ」の社会と個人

（発表者）佐取愛香
（司会）　猪熊恵子</td><td>“A Might Have Been on the Other Side”: Laurence Oliphant's Missions to China and Japan in Margaret Oliphant's Memoir (1891)

（発表者）中越亜理紗
（司会）　Neil Addison</td></tr>
<tr><td>部門別
シンポジウム

14:40
｜
16:40</td><td>【シンポジウム 1】
イギリス文学部門
3 階 301 教室

亡霊文学を見つめ直す
（司会・講師）中嶋英樹
（講師）　侘美真理
（講師）　小林広直</td><td>【シンポジウム 2】
アメリカ文学部門
4 階 401 教室

死者を悼む
（司会・講師）宮本文
（講師）　五十嵐奈央
（講師）　古村敏明</td><td>【シンポジウム 3】
英語学・英語教育部門
5 階 501 教室

センター英語を振り返る――テクスト分析の観点から
（司会）　瀧口美佳
（講師）　伊澤高志
（講師）　樫村真由</td></tr>
</table>

			（講師）　北 和丈 （講師）　佐藤繭香 （講師）　土屋結城
	懇親会（中止） *新型コロナウイルスの拡大状況とご参加の皆様の健康及び安全を考慮し、やむなく中止することといたしました。		

開場・受付開始（12:00 より　エントランスホールにて）

13:00-13:40【研究発表 1】

第 1 室（7 階 701 教室）

（発表者）早稲田大学文学学術院英文学コース助手　篠原健吉
（司会）獨協大学教授　前沢浩子

愛されることを学ぶ――『リア王』における眠りの舞台表象に関する一考察

シェイクスピアの『リア王』第四幕第七場には、椅子の上で眠るリアが舞台上に運ばれて来る場面がある。この場面は和解の場面と呼ばれ、多くの批評家から感動的であると称賛の声が寄せられてきた。しかしリアの眠る姿に注目すると、従来の解釈とは異なる様相が浮かび上がるように思われる。本発表では、愛情テスト後の愛をめぐるリアの認識の変化を追いつつ、宗教的な文脈で語られることの多い、また劇的機能としても用いられることが多い眠りの脆弱性の問題に焦点を当てる。これにより、リアがどれほど愛されていたのかを検証する。さらに眠りの性質にも着目することで、リアはこの場で認識すべきものを認識することができなかったのではないか、すなわち、自分は愛されているということを認識できる最大の機会を眠りによって失ったのではないかという点を論じたい。その上で、この時の認識の失敗こそが最終場の悲劇を招いた要因と成り得る可能性を検討する。

第 2 室（7 階 702 教室）

開催なし

13:50-14:30【研究発表 2】

第 1 室（7 階 701 教室）

（発表者）慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻博士後期課程　佐取愛香
（司会）東京医科歯科大学准教授　猪熊恵子

流通する名前――『互いの友』における「見せかけ」の社会と個人

本発表ではチャールズ・ディケンズの『互いの友』（1864-65）に描かれるミドル・クラスの社会と個人の関係性を名前という観点から分析することで、ヴィクトリア朝中期の社会に対するディケンズの姿勢を検討する。ディケンズは『互いの友』において表層的な関係によって構成されるミドル・クラスの社会を描いているが、「見せかけ」の社会では個人の実体と名前の結びつきが失われ、名前だけが人々の好奇心と引き換えに噂話を通じて流通する。それ故に、ジョン・ハーモン、ジューリアス・ハンドフォード、ジョン・ロークスミスという一人の人物が同時に社会に存在するという状況が生まれる。さらに、すべての真相が明かされる本作品の結末は「見せかけ」の社会の多面性を提示する。『互いの友』は、そのような「見せかけ」の社会のなかに信頼できる本質を見出すことは困難であるという、ディケンズの当時の社会に対するまなざしを示している。

第 2 室（7 階 702 教室）

（発表者）東京大学大学院人文社会系研究科博士課程イギリス文学専攻　中越亜理紗
（司会）日本女子大学教授　Neil Addison

"A *Might Have Been* on the Other Side": Laurence Oliphant's Missions to China and Japan in Margaret Oliphant's *Memoir* (1891)

Laurence Oliphant was a prominent and problematic Victorian celebrity, being a traveller, a diplomat, a Member of Parliament, a spiritualist, and a Zionist. Margaret Oliphant published *Memoir of the Life of Laurence Oliphant and of Alice Oliphant, His Wife* in 1891. Her privileged access to his personal correspondence, her friendship with Alice, and her literary capability distinguished her as a highly competent biographer. However, some critics were unsatisfied with her intentional omissions and method of editing. With particular attention to Chapter Six, "The Mission to China," which also includes Laurence's experiences in Japan, this presentation investigates how Margaret established his image as an intrepid achiever by integrating representations of the two Asian "empires." It is also argued that Margaret's obsession with

Laurence comes from her own unfulfilled longings for freedom, as he embodied her idea of "a *might have been*." This presentation endeavours to tackle layers of complex issues concerning life writing, travelogues, postcolonial discourse, and gender, aiming to contribute to a wider discussion of Victorian globalisation.

【部門別シンポジウム】14:40-16:40

<シンポジウム１：イギリス文学部門> 3 階 301 教室

（司会・講師）多摩美術大学専任講師　中嶋英樹
（講師）東京藝術大学教授　侘美真理
（講師）東洋学園大学准教授　小林広直

亡霊文学を見つめ直す

亡霊、幽霊、死者の霊などを扱う文学作品をめぐる研究は、1990 年代から 2000 年代にかけて、かなりの蓄積を見せた。思想史家 M・ジェイは、文学研究や視覚文化研究などでの亡霊的なものへの関心を指摘し、「不気味な 90 年代」と呼び、R・ラックハーストも、同様の傾向を「亡霊論的転回（spectral turn）」と整理した。

ここで指摘されるのは、亡霊が、歴史、時間、個人の内面、さらには女性の立場なども語りえる隠喩や比喩として使用される傾向だった。こうした傾向は、亡霊の隠喩を正典とされる作品のなかにも読み込むことを促す成果はあったが、それと同時に、個々の時代や作品の置かれた文脈を蔑ろにすることも度々指摘されている。

今回の企画では、以上のような整理を受けて、あらためて、亡霊文学を見つめ直していく。登壇者ごとに、亡霊の隠喩をさらに推し進めることと個別性を記述することへの力点は異なり、扱う時代も限定的ではあるが、転回以後の亡霊の語り方の一端を示していきたい。

「生者の幻」現象と『ダロウェイ夫人』

中嶋英樹

生命の危機に瀕した者の霊が、遠く離れた親族や友人のもとを訪れる。このようなモチーフの幽霊譚は、遅くとも 18 世紀初頭には登場し、19 世紀末には、H・ジェイムズ、C・ドイル、A・ブラックウッドの短編作品など、ささやかな流行を見せた。今回の発表では、こうした流行の歴史的背景として、上述の現象を“crisis apparition”や“phantasm of the living”と呼び、イギリス全土に渡る大規模調査を行った英国心霊研究協会を取り上げ、さらに、同現象を V・ウルフの『ダロウェイ夫人』――心霊主義や心霊研究の文脈で論じられている（Johnson, 麻生など）――における死の追体験の場面と比較する。この比較はその成否が問われるものかもしれないが、心霊研究が“community of sensation”というメスメリズムの概念を手直しつつ、血縁関係なども超える親密性や共同性の概念を構想していたことを示し、『ダロウェイ夫人』にも同様の関心を読み取っていきたい。

幽霊とセンセーション——M. E. ブラッドンのゴーストストーリーを読む

侘美真理

ヴィクトリア朝の「ゴーストストーリー」の流行にはM. E.ブラッドンやR.ブロートンなどセンセーション小説を書いた女性作家の貢献がある。幽霊とセンセーション、spectrality とsensationalism の関係性は、‘Female Gothic’に由来するゴシック的不安で語られることが多い。センセーション小説も幽霊譚も、家庭内の秘密や女性の不安定なアイデンティティを暴露するからである。確かにその意味では、ドメスティックな領域に「他者」が侵入する haunting の議論（Wolfreys 他）や、女性の物理的・精神的な抑圧を読みこむ議論（Dickerson 他）はうまく適合する。しかし、一方でブラッドンの幽霊譚にゴシック的なホラーは感じられない。抑圧された過去の重荷やそれに伴う身体的な脅威や暴力性を幽霊が背負うこともなく、また「神経」に障ることもない。本発表ではブラッドンの代表的な幽霊譚を取り上げ、幽霊と生者のある種の‘communion’について検証し、1860-70 年代に流行した心霊主義の physical materialisation とも絡めながら、ゴシックとは異なる視点で読んでみたい。

亡霊が亡霊に出会うこと
——ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』第 15 挿話「キルケ」再訪

小林広直

Shari Benstock の“Ulysses as Ghoststory”(1975)は、その表題が端的に示すように『ユリシーズ』を「亡霊譚」として読む批評史上の系譜において決定的な役割を果たした。彼女は『ユリシーズ』第 9 挿話で語られるスティーヴン・デダラスのシェイクスピア論それ自体の中に、ジョイス自身の創作方法——「影(shadow)」を描くことで全体の「本質(substance)」を暗示させる「ノーモン的手法(gnomonic method)」——が埋められていると指摘する。そこで、本発表が再考したいのは、ベンストックが僅かに言及するに留めた、第 15 挿話「キルケ」のラストにおいてもう一人の主人公レオポルド・ブルームが生後 11 日で早世した息子ルーディの亡霊に出会うことの意義である。2000 年以降の Ghost Studies において論じられてきた、「歓待(hospitality)」をもたらすものとしての亡霊(Julian Wolfreys)や「出来事(event)」としての亡霊との遭遇(Luke Thurston)などを参照することで、亡霊である父ブルームが息子の亡霊と遭遇するという、『ユリシーズ』のもうひとつの亡霊譚としての側面を炙り出したい。

***

<シンポジウム 2：アメリカ文学部門> 4 階 401 教室

（司会・講師）専修大学教授　宮本　文
（講師）宇都宮大学助教　　五十嵐奈央
（講師）神戸女学院大学教授　古村敏明

死者を悼む

本シンポジウムは、ユダヤ系アメリカ詩を研究する司会者が、近年イスラエルとパレスチナの問題が苛烈さを増すにつれて、ユダヤ系アメリカ文学の中でパレスチナを射程にいれることなしに死者を悼むことは、もはやできないのではないかと考えたことに端を発する。

そこでいま一度より広く「死者を悼む」とはどういうことなのか、誰が誰を悼むことなのか、死者を悼むことの困難さ・表現の問題を詩がどう取り組んできたのかなど捉え直す。

二度の世界大戦やグローバリゼーションやパンデミックなど特定の状況が前景化するエレジーの問題や、死者を悼む時に私たちが願う連綿とした営みが続いていく感覚など、それぞれが扱う具体的な詩の手触りとともに提示した問題の重なり合いや距離を確認しつつ、登壇者同士が応答しながら議論を深め、フロアとの質疑応答へ開いていく予定である。

悼むこと連なること

宮本　文

親しい者を悼む時に人がおそらく同時に思いを向けるのが、連綿と続く人類の営みによって死者の血肉や記憶が後に何らかの形で伝わっていくことへの希望とそれが途絶えてしまうことへの不安であろう。死者を悼む自分がやがて消えても、この世界が途絶えることなく死者たちと生きる者たちとが連なっていくことを、人は信仰なり生殖なりを通して、その「連なりの感覚」を探りながらエレジーを紡いできたのではないだろうか。本発表では、Allen Ginsberg や Mark Doty など子をなすという直接的・限定的な生殖の営みのいわば外側にいる詩人たちが、エレジーの中でどのように死者を悼み「連なりの感覚」を探り当て生み出してきたのかを考察する。

繰り返される嘆き——エレジーとして読む、20 世紀前半のイギリス戦争詩

五十嵐奈央

第二次世界大戦中、詩人の Keith Douglas は、前の大戦時のように優れた従軍詩人がイギリスから現れない理由について、「地獄は二度生まれない。それは第一次世界大戦で解き放たれ、今あるのはそれと同じ地獄である」と述べ、現代の詩人が戦場で書くことは全て「同語反復的（‘tautological’）」になると指摘した。戦争詩をエレジーとみなす場合、戦闘や空襲による悲しみ、痛み、苦しみ、そして死が、嘆きの対象となるはずである。しかし、それらが繰り返し表現されると、読者は、取り返しのつかない生の喪失に対して無感覚になり、悼むことよりむしろ、忘却に導かれてしまう可能性がある。この問題を、第一次世界大戦に従軍した Wilfred Owen、2 つの大戦を生き延びた Herbert Read や Robert Graves、戦間期に詩作を始めた Stephen Spender や Louis MacNeice らが、それぞれの戦争詩においてどのように乗り越えようとしたのか、想定されている読者の違いに注目しながら考察したい。

パンデミック時代のエレジー——21 世紀のアメリカ詩に関する暫定報告

古村敏明

エレジーは、旧来より、親しい人の死などへ対する私的悲嘆を、自分が属するコミュニティと共有する公的追悼へ昇華する機能を担ってきた。地域間の距離が縮むグローバリゼーションや、二度の世界大戦を経て、見知らぬ他者多数の死という現実を踏まえた現代詩においては、公的悲嘆による共同体作りという機能も、エレジーに求められるようになる。再び、自身と関係性が希薄な他者の大量死という事象が現実となった現在、パンデミック時代において、エレジーは何の悲嘆を、どのように追悼するのか？エレジーの性質の変化が顕著になった 20 世紀後半の Theodore Roethke, Elizabeth Bishop, Sharon Olds らの詩や、9.11 後にアメリカ詩人がその悲嘆を表現することで苦痛の軽減を試みる「救急隊員」的な役割を担った歴史を踏まえ、パンデミック時代のエレジーを考察する。2020 年に出版された Alice Quinn 編集の *Together in a Sudden Strangeness: America's Poets Respond to the Pandemic* に収録された作品を中心に、21 世紀のアメリカ詩が、パンデミック時代に対し現在進行形でどのように反応しているのかを、暫定報告する。

***

<シンポジウム 3：英語学・英語教育部門>　5 階 501 教室

（司会）立正大学准教授　瀧口美佳
（講師）立正大学准教授　伊澤高志
（講師）東京工業高等専門学校准教授　樫村真由
（講師）東京理科大学准教授　北　和丈
（講師）武蔵大学教授　佐藤繭香
（講師）実践女子大学教授　土屋結城

センター英語を振り返る――テクスト分析の観点から

本シンポジウムは、大学入試センター試験英語問題（以下、センター英語）を、狭義の英語教育政策のみならず、社会の動向と文化的状況をめぐる諸言説が入試問題という形で具現化した「テクスト」であると捉え、そこから読み取れるものを検証する機会としたい。5 名の講師を迎え、学習指導要領の変遷も踏まえつつ、センター英語を総体として電子化したコーパスの分析を端緒に、3 つの異なるテーマによる長文読解問題（第 5 問、第 6 問）の精読を通して、テクスト分析の観点から改めてセンター英語を振り返る。

大学入試センター試験英語問題における「グローバリゼーション」

伊澤高志

本報告では、学習指導要領が英語学習の目標のひとつとしてきた「国際理解」や「異文化理解」、およびそれらの背景にあると考えられる「グローバリゼーション」や「異文化コミュニケーション」の概念が、大学入試センター試験英語問題においてどのように表象されているのかに着目する。具体的には、学習指導要領の改訂を追いながら、主として長文読解問題（第 5 問、第 6 問）のテクストを読解していく。そこに見えてくるのは、「他者」を理解し歩み寄ることなしに「他者」が歩み寄ってくるのを待つばかりの、およそ「異文化理解」や「異文化コミュニケーション」の理念とは相容れないような表層的かつユートピア的なグローバリゼーション観である。それを提示することで、これからの英語学習・教育のあり方を考えるヒントとしたい。

大学入試センター試験が映し出す英語——電子コーパスとして読む英語問題

北 和丈・樫村真由

大学入試センター試験に用いられる英語は、受験者の視点から問題としての難易度等を分析して消費する対象でこそあれ、日本の英語学習者に「英語」という言語の典型像を示してきた発信者としての側面が省みられることはなく、あまつさえその像の代表性や妥当性が論じられることはほぼ皆無である。本発表で紹介する研究は、総体として電子コーパス化したセンター試験英語問題を、受験者の特性が近い実用英語技能検定 2 級の問題、ジャンルを問わない一般的な英語使用の傾向を示すと考えられる The Corpus of Contemporary American English と比較・分析し、さらには準拠した学習指導要領別にセンター試験英語問題を分割して経年変化を追うことで、前述の課題に取り組む足掛かりを得んとする試みである。とりわけ本発表では、直接的・友好的なやり取りや出来事を描く割合の高さ、日本に関する話題への偏向といった、内容面における特有の歪みに着目し、この大規模試験を適切に「歴史化」するための入口を提示したい。

ジェンダーから見る大学入試センター試験英語問題

佐藤繭香

大学入試センター試験が実施されてきた 31 年間の間に、学習指導要領におけるジェンダーの捉え方は変化しており、センター試験もそれを反映している。本発表では、センター試験英語(筆記)問題の物語文に登場する登場人物がどのようなコンテクストで登場したのかを分析し、登場人物らの性別の特性や性別役割分担の変化を追っていく。本発表では、センター試験英語(筆記)問題を「現代の日本における英語像の一部」を形成してきただけでなく、さらには現代日本における「男女の役割の定形化された概念」の形成の一助を担ってきたかもしれない「かくれたカリキュラム」のひとつとして捉えたい。それは、現代の日本の英語教育におけるシェンダー問題の扱いについて振り返る良い機会となるだろう。

“Understandings without Language” ——大学入試センター試験が描くコミュニケーションの理想像

土屋結城

本発表は、外国語（英語を含む）に関する高等学校の学習指導要領において、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」（平成元年度告示版）、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝

えたりするコミュニケーション能力を養う」（平成 20 年度告示版）という目的が掲げられてきたことに鑑み、大学入試センター試験の英語問題が描いてきたコミュニケーションのありようを、長文問題の精読を通じて明らかにしようとする試みである。特に議論においては、男性同士が分かり合う様が描かれた初期の問題から、情報の読み取りが求められた中期の問題、そして道徳的ともいえる読みが推奨される後期の問題へというおおまかな変遷のさまを提示することになるだろう。

会場アクセスマップ

＊正面入り口からのみ入構可

(受付) 1 階エントランスホール

(研究発表)

第 1 室　7 階 701 教室

第 2 室　7 階 702 教室

(シンポジウム 1)

3 階 301 教室

(シンポジウム 2)

4 階 401 教室

(シンポジウム 3)

5 階 501 教室

(控　室)　　8 階 801 教室

(書籍展示)　3 階 301 教室前

https://www.chuo-u.ac.jp/access/ichigayatamachi/

（市ヶ谷田町キャンパス）

東京メトロ南北線・有楽町線市ケ谷駅（6 番出口正面）、JR 中央・総武線市ケ谷駅徒歩約 5 分、都営地下鉄新宿線市ヶ谷駅（A1 出口）徒歩約 5 分